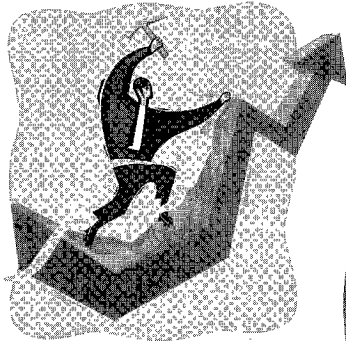


Robert Insall University College London

翻訳：稲吉 宏明 産総研



(訳注) 本小文は、Current Biology Vol.7, No.6, 1997, p. (R331) の "My word" という欄に掲載された記事を Elsevier Science 社から許可を得て翻訳したものである。内容は、「講演の重要性」に関する考察であり、同雑誌そのものは生物系の読者が対象だが、同記事は情報系読者が読んで得るところがあると思われるので、ここに紹介する。なお、以下で [ ] 内の記述は、訳者が補足・付加したものである。また、情報処理 Vol.41, No.6 のほっとタイム (p.713 & 745) でも、講演に関する記述があるので、ご興味のある方は参照されたい。

.....

科学者[技術者]は、しょっちゅう講演する。講演は、我々の主要な商売道具 (the main tools of our trade) の1つである。中にはあまりに多くの講演をするため、いったいどうやって実験の時間をつくるのだろう、と思える人たちもいる。ラボヘッドたちは 세미나を開いたり、コンファレンスでスピーチをし、これらにより彼らのラボの仕事の世界に売り込み、また最適な人々を引き寄せて彼らのために働いてもらおうとする。大志を抱くラボヘッドたちは彼ら自身を売り込むために、見込みのある雇用に自己宣伝 (job talks) をする。ほとんど全員が、講演をしてそれにより自分の仲間に自分の仕事内容を知らせている。すべての場合において、講演者は何かに関して聴衆を納得させようとし、講演者がこれに成功するかしないかは、本当に重要である。

講演はこれほど大切なものであるから、すべての講演者は、明快でなるほどと思わせようと懸命になっているもの、と考えるかもしれない。実際には、コンファレンスに出席した誰もが証言するように、プレゼンテーションの品質はきわめて多様である。私はある科学者[技術者]の仕事が他人の仕事より良いかどうかを述べているのではない—すばらしい結果は確かに有利ではあるけれども—しかし本当に良い講演者が演壇に立つと、聴衆の人々が目を見開き、元気づいて、納得していることが見てとれるであろう。悲しいことにこれと逆のことが、はるかにより頻繁に起きている。典型的なインテリ ('egg-head') の科学者[技術者]は伝統的に、外部世界とコミュニケーションすることがまったくできないが、しかし科学的事項に関して自分の仲間に説得力のある話ができない

.....

というのは、軽率に思える。

講演は常に、語られないメッセージ (unspoken messages) を伝える。明

白な部分 (これが結果で、これは私の解釈

で、これが実験をした人たちです) はストーリーの半分に過ぎず、そしてこれはしばしば文献に少なくとも載っているものである。しかしたいいていの人々は、たいいていの講演でより微妙なメッセージを受信し、そのメッセージで、講演者が成功しそうかどうかとか、そのラボの仕事を読む手間をかけるべきかどうか、を判断する。

本当に腕の良い講演者の場合、この底流 (undercurrent) [のメッセージ] はほとんど目につかない: データは自分自身で説明しているように見えて、その[腕の良い講演の]聴衆は講演後のコーヒーに向かいながら、なぜ自分の実験ではあれほど明快な結果が出ないのか不思議に思う。もちろんそれはすべて、演技 (performance) に[秘密か]ある。生の数値や絵はストーリーを話さず、人々がストーリーを話すのである。悪い講演のよくある原因の1つは、講演者がデータに気にしすぎてメッセージを忘れてしまうことである。しばしば講演するたいいていの人々は、これをやってしまっている。あなたも予想できるだろう—最終結果を得るために数週間熱狂的に仕事をして、そのスライドを講演の前夜に作成したものの、そのスライドが何を意味するのか誰も理解できない、と分かる。これはほとんど絶対成功しないのだが、しかし我々はまだこれを試み続けている。説得力の乏しい講演者はしばしば、「良いデータだがいってい全体どういう意味なの?」という苦情を述べさせる。しかし何も意味しないデータが、どうして良いデータであり得



るのか？

けれども本当に悪い講演者は、隠れたメッセージを送っているものの、間違っただけで送っている人々である。たとえば不幸なことだが、いかに多くの人々が、見せるのにかかる時間の

2倍ものスライドを詰め込んで自分たちの生産力を示そうとすることが、生産力を示唆する代わりに——何とんでもさらに悪い研究者は、30または40ものスライドを何かのデータで埋めるかもしれない——これはたいがい、混乱して理解不能の印象を与える。そしてもしこの研究者がデータを理解していないのであれば、一体誰が理解するのか？ 私はかつてある講演者が、割り当ての20分をはるかに越えて、連続した4つのスライドを「最後のスライド」と呼ぶのを見た。彼はさらにスライドを示し続け、聴衆は彼が自分の結果に関してスライドのナンバリング同様、寛大だろうかと考え続けさせられた。

同様に自分の権力と重要性を認めさせようとする講演者は、たいがい失敗する。彼らはこれを試みようとして、ポスドクが多すぎるために名前を思い出せないといったり、あるいは次の話者はその始めの10分に値しない[ので自分がその時間をもらう]ことを示唆したりするかもしれない。これは決してうまくいかない——その講演者は影響力があるというより、あてにならないと単に見られるだけである。

スライドとOHPは、意図したメッセージととても異なるメッセージを伝えることもある。過度の多色のアート作品は、ありがたいことに稀になりつつあり、良くて単に気を散らすだけなのだが、不完全なデータと一緒にになるとその隠れたメッセージは「私は私のデータよりも私のアートに気をを使う」となる。たとえば[データを]コンピュータで作成した蛍光縞を背景に提示してみても、瓜のつるになすびはならぬ。同様に、講演者たちが「あなたたちには見えないのは分かっているがしかし……」と言いながら異様に細かいスライドをしばしば提示する。講演者が提示したデータを[細かすぎて]誰も見ることができない場合、それは一体どんなメッセージを伝えるのだろうか？

まとめると、講演を行うということは広告キャンペーンを流すことに似ている——全体としてのメッセージが重要なのである。どちらかといえば、これ[講演]は広告業よりもやさしい、というのは出席するたいていの人々はおそらく納得させられたがっている。我々、つまりあなたの聴衆は演技(performance)を求めて出席するのであり、もしあなたが良い演技ができなければ、あなたは失敗したのである。しかしながら、もしあなたが我々を楽しませられたのであれば、我々はあなたに好意的になり、あなたの論文を探さるだろう。さらにあなたのデータの理解にまで到達するかもしれない。科学者[技術者]にとって、これ以上に望ましいことがあるだろうか？



## おひいすらん

私は今(というか小学生のころからだが)ミステリー小説にハマっています。最近のミステリーはだれが主人公なのか、だれが語り手なのか判然としないものが増えてきたように思います。先日インターネットで読むハイパーテキストの小説(「99人の乗客」というタイトルだったと思うが)で、登場人物のどれの視点からでもストーリーを展開できるというので試しに読んでみたのですが、どの登場人物の視点にするか迷ってしまい、なかなか読み進むことができませんでした。

思い起こせば、私がこのような複数の登場人物の視点に立つてストーリーが語られる小説との最初の出会いは10年以上前ですが、バルカス=リョサの「都会と犬ども」というのが初めてだったように思います。この小説では、テレサという少女について2人の少年の視点で語られているのですが、人によってその少女に対する印象が違っているので、少女の名前がでるまでは同一人物について語られているということが最後の方までわかりま

せんでした。この手法がミステリーで使われると、謎解きが非常にむずかしくなります。語り手が変わるものですから、Aの視点で「これが犯人だ！」と思っても、Bの視点では他の登場人物が怪しかったりします。ミステリーに関してだけ言えば、むずかしくなる=おもしろくなる、なので歓迎すべき点ですが、長くなる傾向があります。

他にも最近のミステリーは、主人公=探偵役が実に多彩なものです。陰陽師、風水師、精神科(心療内科)医師などが多い。たまたま私が読んだ小説がそうだったのかもしれませんが、主人公の職業にも流行というものがあるようです。

ハイパーテキストの小説にはまだついていけません、語り手が5人ぐらいいまでなら私にもなんとかなりそうです。

何はともあれ、皆様も秋の夜長にミステリーはいかがですか？

(老川ひろ子/会員サービス部門)